

アトモスフィア

大学教員の資格

畑 裕*

「アトモスフィア」に執筆の機会を頂いた。有難いお話とお引き受けしながら、忽ち、自分に何を書く資格があるのかと気後れし始めた。「アトモスフィア」は「生化学関連領域の現状や将来について、独自の切り口で忌憚のない意見」を掲載する場だという。これまでに、多くの先生方が、ご自身の専門領域の研究史、研究制度のあり方、国の科学政策などについて、大所高所からのご意見を発表されている。ただし、それは、然るべき先生方が、然るべき実績の上に意見されているのであって、生化学会会員になって、おろおろ五年、うろろ十年、いたずらに時を過ごして、学会に、社会に、何ほどの貢献もしていない自分が、驥尾に付してものを言い始めたなら、迂闊粗忽の謗りを免れまい。もとより私にだって意見はある。研究者心得、研究費配分問題、教育制度、はては、原子力政策に、エネルギー・環境問題、ヒトゲノム計画終了以降の人間観、教室内であれば、スタッフ、大学院生を、誰彼となくつかまえて、彼らの当惑、困惑、迷惑顔を他所に、云いたい放題、自説開陳に及ぶのだが、「磯野波平の言葉」と逃げを打つだけは忘れない。磯野波平は、いわずと知れたサザエさんの父上だ。Wikipediaによれば中堅どころの会社の平社員。当年とって五十四歳。筆者と一緒に。世間的につぶしが利くとは思われない。それでも、磯野家にあっては、家長として君臨し、カツオ、ワカメに説教もすれば、サザエさんやマスオさんに訓示もたれる。家の外で大きな顔をできなくとも、教室内限定ならば意見を云っても許される。しかしながら、「生化学」誌は磯野家の茶の間ではない。昨今、ブログやツイッターが跋扈して、言論の自由も極まった観があるが、言論の責任を無視できない。責任がとれるテーマは何かと自問して、思い当たるのは、医学科学生対象の生化学教育だ。この話題については、「責任がとれる」というよりも、責任をとらないわけにはいかない。私の講義で単位取得した学生は十一年間で九百人ほどになる。五百人以上はすでに医師免許をもって診療にあたっている。私が生化学教育についても語る資格がありませんと投げ出したならば、卒業生のみならず、彼らが担当している患者様にも申し訳が立たない。と、雄雄しく覚悟を決めたところで、再び疑問に突き当たる。自分はいかなる資格をもって医学科学生の生化学講義の教壇に立っているのか？ 大学設置基準第14条に教授資格が定められてはいるが、その内容は抽象的だ。そもそも教育能力についての記述がない。中学校、高等学校の教員になるには教育実習が要求され、採用試験もある、臨床医には認定医、専門医の資格がある。医学科学生に講義を始めるにあたって、生化学教育認定試験を受けた記憶はない。着任当初は学生時代の記憶を頼りに授業を準備した。医学科一年生で講義をうけてから二十年近くが経過していたが、幸い、グルコースは相変わらずグルコース6リン酸になってピルビン酸まで代謝されていたから、なんとか最初の学年を乗り切った。爾来、十回も講義を反復すれば、さすがに最近は大分、内容が練れてきている（と思う）。けれども、古今亭志ん生が火焰太鼓を生涯に何度、高座に掛けたかなどと考え始めたならば、前座か、せいぜいのところ、二ツ目か、真打になるには程遠い。いまだ修行の身で、毎年、改訂修正が必要になる。学生が優秀で、不備を補ってくれている面もある。自分の講義が、木戸銭を頂戴して、聴講生を集められるレベルに達しているのか、不審が残る。確かめる術もないし、確かめる勇気もない。医学科の授業を全てビデオに収めて公開する計画もあったが、著作権の問題で有耶無耶に終わり、内心、ほっとした。本当は、そこで安堵しているようではいけないのだろう。放送大学の講義を担当される先生方のプレッシャーは相当なものと同察する。生化学の教科書一冊を、独りで書き下ろすくらいになれば、少しは自ら頼む気持ちも出来て、安心するのだろうか。この問題を余り突き詰めると、しまいには、コアカリキュラム、共用試験に続いて、医学科教員資格認定試験が制度化されそうで、それでは余りに味気ない。寝ている子供を起こさないように、そっと密かに、今年も講義録を見直し始めている。

*東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科